

96年11月に東京で国際会議が開かれました。ここで私は、中国や台湾、韓国一流の学者を招いて、漢字の重要性を発表しました。中国においても韓国においても、漢字を覚える能力は幼児期が高いということが認められてきました。

ことに中国本土では、大変な勢いで幼児の漢字教育が広まっています。北京に国際漢字教育研究会というのができて、私は名誉会長に委嘱されました。石井式幼児漢字教育を中国で普及したいという中国の学者が会をつくり、現在、中国では30万人の幼児が学習しています。

漢字教育は非常に重要であると同時に、その漢字を学習する最適の時期は幼児期である、ということの世界中に広めることがこの会の目的です。

世界中の幼児教育は、まだ“成熟優位”の学説から抜け切っておりません。成熟優位というのは、年をとればとるほど学習能力は向上していくから、成熟を待って学習させるという考え方です。これが世界の幼児教育の基本的な考え方と言っていいでしょう。

では、いったい生後10か月の赤ちゃんには、どうやって覚えさせるかと思われるでしょう。もちろんまだ1歳にもならない子どもですから、いくら「目」や「耳」と漢字を教えても口では言えません。ですから文字

を書いて見せるのです。

赤ちゃんは、耳という言葉の頭で受け入れることができなくても、文字は覚えることができます。信じられないかもしれませんが、ゼロ歳でも可能です。幼児は言葉が言えないうちから、漢字を識別することができるのです。

NHKの『くらべてみれば』という番組で、2歳の子どもにこんな実験をしました。

まず、子どもたちにいろいろな絵を見せます。その絵の裏には、一方は漢字、もう一方はひらがなで単語が書いてあります。6人の子どもを半分に分けて、カードを何回か教えてから読ませて比べたのです。読むカードは3枚です。

その結果は、漢字で習った子どものグループは、3人とも100%読めました。ところが、“かな”組は30%しか読めませんでした。もちろん30%でも大したものだとは思いますが、この差は単に100%と30%の違いではなくて、漢字のほうが覚えやすいことを実証したのです。私が教えた中では、幼稚園の子どもでも漢詩をスラスラ読みます。

このように、子どもは早くから漢字に対して興味を持ち、反応を示すということをわかっていただきたいのです。